熊本大学教育学部紀要,
第62号，199－208，2013

絵画・ものづくりの融合制作の実践２

― 教育教材としての試み ―

松 永 拓 己・工藤明日香*・岩 本 望 来*・西 田 真 理*

Practice of the Fusion Work of Picture and Crafts Part 2

― An Attempt to Use as Educational Teaching Materials ―

Takumi MATSUNAGA Asuka KUDO Miku IWAMOTO and Mari NISHIDA

（Received by October 1, 2013）

This paper is practice of work by fusion of pictures and crafts. I think that it is difficult to draw. First, you have to imagine and draw. We can draw a picture with paper and a pencil. However, the image to which the person himself/herself is convinced must be made. You have to use a tool well. You make an image evoke and draw happily with various tools. We add the craft to pictures work and perform a new trial. We perform the lesson which sticks fallen leaves or a sprig. We perform the lesson which draws a Yamato-e painting on a shell. It draws the miniature based on history culture. We perform the lesson which makes a picture float. It attaches and floats a picture on a balloon. We perform these three by the lesson of an elementary school. Work time is short at an elementary school. And the content suitable for the producer's age is needed. We were able to do it with the content which can have and draw interest happily according to a technical charm and the content. We are recording the situation of questionnaire record and a lesson in the text. Although three lessons were successful, preparation was serious, time was restrained and there was also an insufficient element. We would like to contribute to the lesson devising.Making with interest and zeal is inducing a good work.

Key words : Picture, Crafts, Create, Technology, Lesson.

Ⅰ　はじめに

絵画とは，平面に描かれた形象である．絵画の可能性を探る．

「絵画・ものづくりの融合制作の実践１」[1] において，絵画をものづくりの視点で考えた．そこでは絵画の存在意味をクリエイトという視点から「創造」することの困難さ崇高さを論じ作品完成の意義を唱えた．

本稿では前稿でのワークショップ形式実践から，取り組み内容を考察し，教育現場での授業実践へ移行し絵画表現の教育教材開発を試みる．

Ⅱ　教材としての３つの試み

本研究の目的は，絵画の多様性を模索するとともに新しい図画工作教材を確立することである．そこで，ものづくりとの融合の視点から 2012 年に行ったワークショップ [2] を発展させ，年齢に応じた内容で限られた授業時間内で場にいる全員に描かせることを考察する．描くことが苦手でも面白さを感じない人でも描くことになるため，絵画表現の稚拙さの感覚を緩和し面白さと絵画の教育的意義を包含した複合的な教材として開発を試みる．

絵画はイメージを自由に繰り出し平面に固着させる行為である．絵画制作にはイメージの創出と描写の２つの側面があると考える．モティーフ（動機）により喚起され，手を動かし，描き表わされることが一連の絵画行為である．描写には一般には紙と鉛筆・絵具などが挙げられるが，本研究では，モティーフ・用具に異要素を付加させる．そこでは，紙と鉛筆・絵具とは異なる描出感覚があると思われる．モティーフは制作意欲を喚起させる重要な要素である．そして描写用具はイメージの具現化に必要な要素である．落ち葉，小枝などの自然物，貝殻への絵付け，浮遊する異現実感

* 教育学研究科修士課程

をモティーフや描写用具として取り入れる．これは，ものづくり的要素を取り入れることで通常の描写感覚と異なる思いでそれぞれの素材を活かし，適する技術を付加させた新感覚での絵画制作を行うことになる．

教育実践は，熊本市立本荘小学校（石井祐治校長）にて平成25年3月14日に行った．

本実践を行う上で教育教材として熊本市フレンドリー（適応指導教室）にて実践，石井校長先生との協議を繰り返し，図画工作における教材化へと至った．

イメージを醸成し具現化させる絵画描写行為であるが，取り組み法は描画素材により広がる．ここでは，ものづくり要素に着目し3つの絵画制作教材を試みる．それは以前に取り組んだワークショップを母体とし，対象学年，制作時間による改変を行い，絵画表現の在り方を工夫した．

「このはコラージュ」では自然素材コラージュによる絵画イメージの描出を試みる．抽象化的要素を含み用具の扱い難度から検討し対象は5年生とする．

「小さな絵画―貝合わせを描こう！―」では蛤に大和絵を描く．歴史文化との兼ね合いとミニアチュールという小作品のため細かい作業が行われることから対象は6年生とする．

「ふわふわピクチャー」では風船に絵を着け浮遊させる．低学年でも興味・関心を与える内容であるが時間的制約と用具の活用を考え対象は4年生とする．

教育現場で扱う教材として，対象児童・生徒に即した用具，内容の吟味とねらいが必要になる．年齢に即した絵画の培う基礎的能力を包含させ，且つイメージの醸成と具現化への歓びを齎すことを求める．異なる3つの取り組みではそれぞれに形式は違うが，人の内面に湧き起るイメージを描出できる能力の醸成を達成感と共に図ることが共通の目的となる．一般的な趣向とは異なる描写の授業である．

Ⅲ　教育実践について

Ⅲ－1 「このはコラージュ」

(1) 実践者　工藤明日香

(2) 教材としての目的

「このはコラージュ」は木の葉を意図的にちぎったり，本来の形を生かしたりして基底材である杉板に貼り付ける実践である．児童・生徒たちには自然物の魅力に気付かせ，具象表現だけではなく抽象表現のよさを味わわせる．

(3) 実践までの流れ

(3) －a　フレンドリーでの実践

適応指導教室「フレンドリー」での授業実践にあたり，ものづくりフェアでの実践から2点において変更を行った．1つ目は採集の活動をとり入れた点である．フレンドリーでは，2時間のうちの1時間を描画材の採集時間にすることで生徒たちとのコミュニケーションの時間を設けた．こうすることで生徒たちとの交流を図るとともに，題材に対する関心を高め，制作に反映するようにした．自分の手で拾い集め，探すという過程は自然物の特徴をよく捉え，発見する時間にもなり，作品の構想にも繋がったように思われる．

2つ目の変更点はグルーボンドの使用を指導者のみに限定したという点である．ものづくりフェアでは参加者が多くても同時に5人程度であったため，道具も指導も行き届いていたが，20名の授業では道具不足と指導困難が危惧された．そのためグルーボンドの使用を限定したのである．しかし，同時に20人もの生徒の土台接合の支援はできないという問題が明らかとなった．

(3) －b　事前打ち合わせ（熊本市立本荘小学校）

事前打ち合わせのための学習指導案作成にあたって，フレンドリーでの実践，および対象学年が小学5年生であることを踏まえ行った変更は2点である．1つ目は45分での活動となるため，採集の時間は設けず指導者側が事前に採集した描画材を児童たちに採集させる点である．教室の一角にビニルシートを敷き，その上に採集した様々な自然物を広げ，指導者の助言のもと授業時間内において選択，採集させる．2つ目は，制作時間を確保するために土台をかまぼこ型のみに限定した点である．かまぼこ型は短時間で接合できる点，容易である点，グルーボンドを使わずに接合できるという点から，授業に向いていると判断した．

3度にわたる本荘小学校の石井校長，担任との打ち合わせにより次のことを改善した．それは接着剤の更なる限定である．5年1組の児童は図画工作の授業において木材を使ったり，接着剤を使い分けたりする活動を行っており，乾燥速度の異なる2種類の木工用ボンドのみでの制作でも難しくないと判断したためグルーボンドを使用しないこととした．

(3) －c　事前アンケート・授業観察

児童の実態を調査するため，アンケートを実施した．（熊本市立本荘小学校5年1組12名）

アンケートの集計結果は（図1）のようになった．

事前アンケートから次の3点のことがわかった．1つ目は図工（作ること，描くこと）好きの児童が多いということである．好きな理由を見てみると自由性や創造性を楽しんでいる児童が多いことがわかる．一方「形をうまく描くのが苦手」「絵を描くのは苦手だがみんなと描けて楽しめる」「発想するのが好きではない」

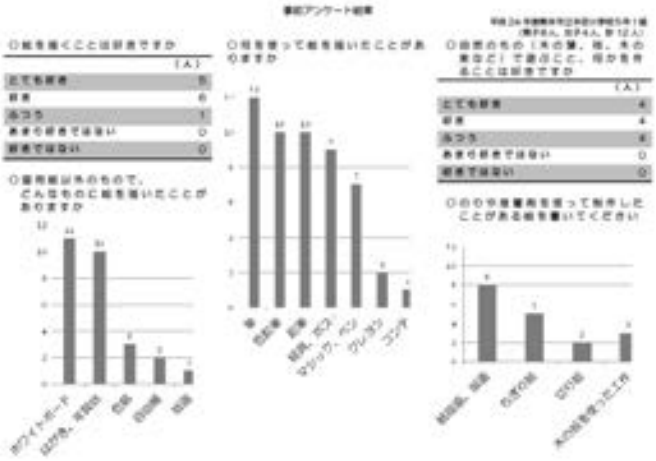


図 1　事前アンケート結果

という児童が 3 名程いたため，描くこととは大きく異なる「組み合わせる」「貼る」といった活動の魅力や，木の葉を動物や人間と見立てるような発想を促す助言を交える必要がある．2 つ目は「絵画」や「描画」に対して固定観念を持っている可能性があるということである．例えば多くの児童は，紙を主とした基底材にペンや鉛筆などの筆記用具で「描く」という表現活動をイメージしている．そのため，様々な描画方法があることを理解させたい．3 つ目は自然のものに対する抵抗はあまりないが，「好き」「ふつう」と答えた児童の中には「そんなに自然のものを使って遊ばない」「自然のものではなかなかアイデアが浮かばない」などの理由を挙げた児童が 5 名ほどいた．

授業観察では，授業態度がとても穏やかであること言語活動が多く取り入れられていることがわかった．

このことから教室の机，椅子を全て後方に下げた床での制作活動と，感想カードによる鑑賞活動を提案した．

(3) －d　指導案

事前訪問でのアドバイス，アンケートによる児童の実態から，学習指導案を練り直した．（図 2，3 参照）

今回の実践では，児童たちにとって接着剤の使用法は既習事項であることから，技術面に関してはその定着を図ることに留め，鑑賞活動と視野の広がりを重視したいと考えた．このため，自然の採集物の「色や形をよく見る」ことを目標の中に取り入れ，そこから自分なりの捉え方や見立てを発想できるよう助言する．また「ペンや画用紙以外で絵を描いたことがあるかな？」といった発問を取り入れることで「描く」だけにとらわれない表現方法を紹介できる授業を意識した．

図 2　指導案 1

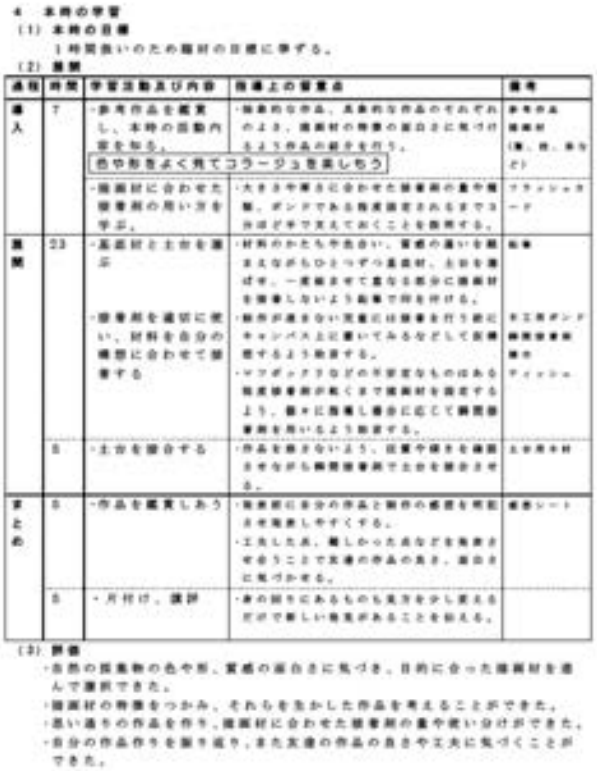


図 3　指導案 2

(3) －e　授業準備

授業の準備にあたり，感想カードの作成を行った．感想カードではタイトルを付けさせることで児童たち自身の考えを明確にし，鑑賞しあう時の手立てになるようにした．

また，選択の幅を広げるため，かまぼこ型の土台の数を児童数の倍以上に用意し，採集物の量や種類を更に増やした．

(4) 実践（熊本市立本荘小学校 5 年 1 組 10 名）

正座の姿勢から始めた本実践で，児童たちは題材に関する要点と注意に関して落ち着いて，しっかりと聞くことができた（図 4 参照）．参考作品を提示したときも意欲的に手が挙がり，考えや見方を巡らせようとしていたように思う．基底材や描画材を選ぶ段階では，率先して自分の意図に沿うものを探す態度や，偶然手にしたものを持ち替えたり裏返したりして思考を働かせる姿勢が多く見られた（図 5 参照）．ただ，描画材を広げたビニルシートの面積が小さく，採集をするときは児童たちも動きにくそうだったため，もう少し広い採集の場を確保する必要があった．

図 4　導入時の様子

図 5　描画材を選ぶ児童たち

図 6　仮構想する様子

接着剤を 2 人ごとに共有させたことで自然と子ども同士で協力して制作する様子が生まれ，質問やアドバイスをしあっていた（図 6 参照）．接着剤の扱い方に戸惑っていた児童も他者の手を借りながら，最後には自分の考えを形にしていくことができていた．

図 7　完成作品例
『森の秘みつ…
おばけ三兄弟』

感想カードを記入する時には一人一人が自分の作品に何らかの形でこだわりを持ち，個性溢れる作品とタイトルを考えることができていた．鑑賞しあう時間が足りず，2 作品しか紹介できなかったため児童たちはもっと他者の考えや作品を共有したがっていた印象であった．

(5) 分析

(5) －a　事後アンケートまとめ

学習の成果を調査するためアンケートを実施した．（熊本市立本荘小学校 5 年 1 組 10 名）

図 8　事後アンケート結果

アンケートの集計結果は（図 8）のようになった．なお，事前アンケートとの差異があるのは，欠席者がいたためである．

出席した児童の 10 名全員が「とても楽しかった」と答え，その理由として「自分の思ったとおりの作品ができたから」（5 名），「色んな自然のものを使ったから」（3 名）など達成感，素材の面白さを挙げたものが多かった．また，今後他にどんなものを使って絵を描いてみたいか，という質問に対して「布」「ビニルシート」「粘土」などの様々な単語が生まれ，授業前に比べて「描く」という観念が広がっていることが窺える．

(5) －b　考察

「このはコラージュ」を通して児童・生徒たちは自然物の魅力を再発見することができた．加えて事前アンケートや指導案で想定していなかった布やビニルシートといった異素材で作品を作りたいという発想が生まれたのは重要な変化であろう．

「このはコラージュ」を教材化するにあたって考えられるのは対象学年と材料の準備の問題である．身近な自然の採集物を使って作品を制作するのみに留まると低学年向けの見立て遊びの延長でしかない．「描く」「具象でなければいけない」というこれまでの固定観念を払拭し，「抽象でもよい」「こういう描画方法もある」という発見やものの見方の変化は特筆される．この発見や変化といった活動を児童の中で意識的に起こすことで，高学年でも十分に応用できる教材であることが予想できる．材料の準備に関しては，描画材の採集のほか，基底材や土台の木材は専門工具を使って準備し加工する必要があるため，時間や道具を要する．学年全体で取り組むなどして，複数体制の指導で準備することが望ましい．

今回の実践を通して，こうしたコラージュをはじめとするモダンテクニックによる描画方法は「絵を描く」ことに苦手意識を感じる児童・生徒への一助となるだろう．児童・生徒たちは発想する，創造すると

いった表現活動と，見つける，考えるといった鑑賞活動を繰り返し行うことで思考力や発想力を高めることができる．目を養わせ，様々な着眼点を持たせる活動の一つとして「このはコラージュ」を役立てることができるのでないだろうか．

Ⅲ－2 「小さな絵画－貝合わせを描こう！－」

(1) 実践者　岩本望来

(2) 教材としての目的

自然の中にある貝殻を基底材として用いることで，貝殻の風合いを味わうとともに表現の多様性に気づく機会とする．さらに日本の美術作品や文化に関心を持ちそれらを大切にしようとする態度を身につける．

(3) 実践までの流れ

(3) －a　フレンドリーでの実践

「ミニアチュールを描こう！」という題材名で，3 時間の実践を行った．ものづくりフェアでの実践を教材化するにあたり，諸外国や日本の伝統文化に対する生徒の関心を高めるために，ミニアチュールや貝合わせの歴史について理解する時間を設けた．また，技術的に難しい「色づくり」「筆づかい」「水の量」にポイントを絞って練習する活動を取り入れた．さらに絵を描く際に貝殻に水が溜まるという問題を改善するため，貝殻に和紙を貼り吸水性を良くした．

この実践では貝に描く絵柄を生徒に自由に発想させたのだが，そのために日本の伝統的な絵柄を描かない生徒が現れ，日本の伝統文化への関心を高めるのに効果的な方法ではなかったと反省した．しかし，貝に絵を描くという活動は生徒にとって新鮮だったようで，「とても楽しかった」という声が多く聞かれた．

(3) －b　打ち合わせ（熊本市立本荘小学校）

打ち合わせのため，事前に学習指導案を作成した．本荘小学校の実践では，授業時間が 45 分と短くなることに加え，対象学年が 6 年生になることから，時間不足が推測された．そこで，技術面の学習や制作の時間を充実させるために，貝殻は事前に和紙を貼り，金地を塗ったものを準備しておくことにした．また日本の伝統的な絵柄を基に発想を膨らませるために，多くの参考資料を提示することにした．

打ち合わせでは，いくつかの変更点が生じた．まず日本の伝統文化に触れ合わせることに的を絞った授業展開にするために，自由に発想して絵柄を描く活動に代わり，事前に用意された絵柄を選び模写する活動を行うことになった．また貝殻に鉛筆で下絵を描く過程は省かれ，絵具と筆で直接絵柄を模写することになったため，絵柄は児童が描きやすい適切なものを準備することと，制作の仕上げとして輪郭線について指導することが留意点として挙げられた．さらに出来上がった作品の鑑賞の活動について，実際に貝合わせの遊びを体験させることで効果的な鑑賞の活動になるのではないかというアドバイスをいただいた．

(3) －c　事前アンケート・授業観察

児童の実態を調査するためアンケートを実施した．（熊本市立本荘小学校 6 年 1 組 16 名）

アンケートの集計結果は（図 9）のようになった．

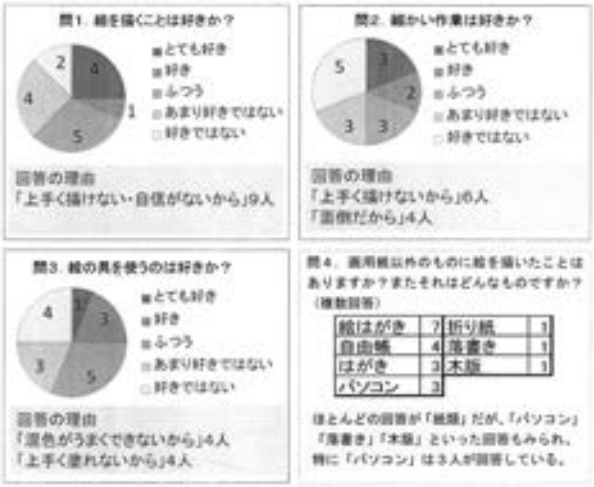


図 9　事前アンケート結果

問 1 ～ 3 の回答理由をみると，絵を描くことについて「上手く描けない・自信がない」と答えた児童が半数以上おり，細かい作業や混色，色の塗り方などの技術面に苦手意識を感じている児童が多くみられた．このことから，「色づくり」「筆づかい」「水の量」の徹底した指導が必要だと感じた．また問 4 の回答から，これまで児童たちはハガキや自由帳などの紙類やコンピューターの画面上に絵を描く経験はあるが，自然物や立体的なものを基底材として絵を描いた経験は少ないと思われた．この結果から，児童らにとって新鮮な貝殻という基底材を生かし，自然物のよさを味わわせ表現の多様性に気づかせるような指導を行うとともに，貝殻は画面が小さく立体的であるため技術面での指導が重要であると考えた．

また授業観察では，児童同士で協力して積極的に学びあう様子が見られた．そこで，班を組んで制作させることで，難しい技術面においても児童同士で学びあうことができるのではないかと考えた．

(3) －d　学習指導案

事前訪問でのアドバイス，アンケートによる児童の実態から，学習指導案を練り直した．（図 10, 11 参照）

制作の時間を十分とれるよう時間配分を見直し，ミニアチュールの説明を省いたため，題材名を変更した．

図書工作科学習指導案

日時：平成25年3月14日（木）　第4校時

場所：熊本市立本荘小学校　6－1教室

授業者：熊本大学教育学研究科　岩本望来

1　題材　「小さな絵画―貝合わせを楽こう―」

2　題材について

平安時代から伝わる「貝覆い・貝合わせ」は，歌留多として，また貝殻の色合いや形の美しさを競うなどして遊ばれてきた。殻の内面には金箔を貼り極彩色に仕上げて絵を描く。本題材では，「貝覆い・貝合わせ」を応用し，貝殻を基底材として大和絵等の模写を行う。金絵具で彩った殻の内側に絵の具と筆で絵を描く活動を通して，子ども達は貝殻の風合いや色合い，形などのよさや美しさを味わうことが出来ると考える。また本題材は自然の中にある貝殻を基底材として用いているため，四角い紙に描くものだけが絵画ではないことや，自然の採取物などの身の周りのものが制作の材料となりうることに気付き，表現の多様性やそのおもしろさを感じ取る機会になるであろう。さらに日本の美術作品や文化に関心を持ち，そのよさや美しさを感じ取ることを通して，伝統的な作品を大切にしようとする態度を身につけることができると考える。

図1　参考作品

図2　完成の作品

本学級は男子11名，女子5名の計16名からなる。事前アンケートを実施したところ，絵を上手く描けない・自信がないと答えた児童が9名，細かい作業に自信がないと答えた児童が8名，絵の具の混色と管彩に自信がないと答えた児童が各4名だった。どの児童も筆などの平面の紙やパソコン上に絵を描いたことはあるが，立体物や小さな画面に描いたことは無いようだ。また15名の児童が日本の伝統的な絵画を知っており，1名がそれらに対する何らかの印象を言葉で表現することができた。

貝殻の風合い・色合い・形のよさや美しさを感じ取らせるために，貝殻を選ばせる際に子ども達に語りかけ意識付けを行う。貝殻は子ども達が普段使い慣れている平面的な紙とは異なり，裏面がとても小さく丸みを持っている。そこで，制作に入る前に綿棒に絵を描くための筆使いを練習させることでスムーズに制作が行えるように指導するとともに，貝合わせや大和絵等の参考資料を提示し制作の手がかりとなるようにする。また子ども達が自分で表したい色を作ることができるよう，演習や机間指導を通じて混色の基礎的な知識と技術を指導する。最後に，完成した作品をクラス全体で鑑賞する際，「貝合わせ」のよさや美しさを感じとるとともに，伝統作品や自分たちの作品を大切にしようとする態度が養われるような語りかけを行う。

3　題材の目標

(1) 貝殻の風合い・色合いや形のよさや美しさを感じ取りながら，楽しんで制作することができる。

(2) 制作の見通しをもって絵柄を選ぶことができる。

(3) 絵の具を混色して表したい色を作り出し，細かい筆使いで丁寧に描くことができる。

(4) 貝合わせのよさや美しさを感じ取り，日本の美術や文化に興味・関心をもって伝統作品や自分たちの作品を大切にしようとする態度を身につけることができる。

図 10　指導案 1

4　本時の学習

(1) 本時の目標

一時間扱いのため題材の目標に準ずる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動及び内容	指導形態	指導上の留意点	備考
導入（2）	○貝合わせについて知る。 めあて：筆使いと色づくりを工夫して，貝合わせを楽こう。 ○本時の目標を理解する。	一斉	○貝合わせの参考資料を提示し，貝合わせの歴史などについてについて説明する。 ○参考作品を提示する。	・参考資料 ・フラッシュカード
展開（36）	○制作のポイントを学ぶ。（5） ○すきな色や形の貝殻を選ぶ。また参考資料から描きたい絵柄を選ぶ。（4） ○貝殻に絵を描く。（24） ○片づけ（5）	個人（30）↓	○筆，パレットをとって席に着かせる。 ○絵の具を溶くときの適切な水の量を指導する。机間指導を行う。 ○三原色について説明し，混色を練習させる。机間指導を行う。 ○筆の穂先を尖らせ，細い線を引く練習をさせる。机間指導を行う。 ○貝殻の色や形のよさや美しさに着目して選ばせる。また細かすぎず描きやすい絵柄を選ばせる。 ○ポイントに注意しながら模写させる。机間指導を行う。 ○仕上げに輪郭線を用いることで完成度を上げさせる。 ○道具を片づけ，机をきれいにさせる。	・貝殻 ・絵筆 ・絵の具 ・筆 ・パレット ・水入れ ・ガロ ・新聞紙 ・参考資料 ・フラッシュカード
整理（3）	本時のまとめ	一斉	○出来た作品を用いてペア探しの遊びを体験させながら，他者の作品のよさを感じ取り言葉で伝えさせる。日本の美術や文化に興味・関心をもたせるような語りかけを行う。	

(3) 評価

・貝殻の風合い・色合い・形のよさや美しさを感じ取りながら，楽しんで制作することができたか。

・制作の見通しをもって絵柄を選ぶことができたか。

・絵の具を混色して表したい色を作り出し，細かい筆使いで丁寧に描くことができたか。

・貝合わせのよさや美しさを感じ取り，日本の美術や文化に興味・関心をもって伝統作品や自分たちの作品を大切にしようとする態度を身につけることができたか。

図 11　指導案 2

(3) －e　授業準備

・貝殻の下地作り（和紙，アクリル絵の具の金地）

・フラッシュカード・資料準備

・制作の手本となる絵柄の準備（対になるよう 10 組準備し，それぞれトリミングの大きさを変え 3 段階の難易度をつける.）

(4) 実践（熊本市立本荘小学校 6 年 1 組 16 名）

技術面の指導について練習の時間や制作中の机間支援で個人へのアドバイスを入れたが，教師一人では手が足りず，他の先生方に支援していただいた．制作に入ると，児童たちは手本に似せようと集中して意欲的に取り組んでいたが，授業時間が 45 分と短かったため，制作時間が足りず途中で打ち切ることになり，鑑賞のペア探しゲームを行うことができなかった.

図 12　児童の作品

図 13　図 12 の手本

(5) 分析

(5) －a　事後アンケートまとめ

学習の成果を調査するためアンケートを実施した.（熊本市立本荘小学校 6 年 1 組 16 名）

アンケートの集計結果は（図 14）のようになった.

授業の満足度についての回答理由や授業の感想をみると，技術面での難しさや苦手意識を克服し，満足のいくように楽しんで制作できた児童が多かったように

◆授業の満足度

授業の満足度について，16 人中 13 人が「とても楽しかった」，3 人が「楽しかった」と答えた。回答の理由として多かったのは，絵具の使い方（混色等）や筆づかいなどの技術面について「上手く出来た，やり方が分かった，おもしろかった」と答えた児童が 6 人，難しさや苦手意識を克服し，満足のいくように楽しんで制作できたと答えた児童が 6 人だった。

「とても楽しかった・楽しかった」と回答した理由（複数回答）

絵具の使い方（混色・色づくり・色づかい），筆づかいに関する理由	6
難しさや苦手意識を克服し，満足のいくように楽しんで制作できたから	6
上手く出来たから	2
貝殻に描くのは初めてで面白かったから	2
先生たちがいろんなことを教えてくれたから	1
歴史に触れながら描けたから	1
ものづくりがとても好きだから	1

◆授業の感想（自由に記述）

日本の伝統文化に関する感想の例（5人中）

・歴史を楽しく学んでやることができた。
・昔の人は，金箔も貼って，とても絵が上手だなあと思った。
・昔の人はこういう遊びで盛り上がっているんだなあと思った。今の僕たちはゲームなどで盛り上がっているので，たまにはこういうのもいいなと思った。

技術等の習得や教師の指導に関する感想の例（7人中）

・いろんな色の組み合わせがあることを知った。貝殻に絵を描くと可愛くなることを知った。
・細かいところを描くのはとても難しかったが，見本の色と合っていたので良かった。
・貝に絵を描くことは初めてだったが，意外と上手にできて良かった。またやりたい。
・いろいろなアドバイスがあったのでやりやすかった。細かい線を描くのは難しかったが，ポイントに気をつけて描くことができた。とても楽しかった。
・絵を描くのは得意ではないが，褒められながら絵を描けたので良かった。

◆使ってみたい基底材（複数回答）

色紙	1
半紙	1
和紙	1
鮮やかなもの	1
板	1
鉄	1
ガラス	2
顔	1
地面（ナスカの地上絵みたいに）	1
葉っぱ	1
人間	2

◆使ってみたい画材（複数回答）

鉛筆	4	スプレー	2
色鉛筆	3	コピック	2
クレパス	3	油絵具	1
筆	2	墨	1
マジック	1	チョーク	1
		手	1
		魚のうろこ	1

今まで使ったことのない基底材や画材を回答する児童が多く，中でも自然物や人間の体などを答えた児童は合わせて 7 人だった。

図 14　事後アンケート結果

思う．また授業の感想では日本の伝統文化に関する記述も多く，伝統文化に楽しく触れ合えた児童や，興味・関心をもった児童，自分たちの生活を見つめなおして伝統文化を取り入れていこうとする児童がみられた．さらに，使ってみたい基底材や描画材について今まで使ったことの無いものや自然物等を挙げていることから，児童たちの視野が広がり，自然物のよさや表現の多様性に気付けたのではないかと考えられる．

（5）－b　考察

今回，貝合わせの制作を教材化し実践したことで，この題材の持つ魅力や教育的意義を見出すことができた．貝合わせは日本の伝統文化であり，極彩色に彩られた美しい小さな画面には児童・生徒たちの心を引きつける魅力がある．伝統的な絵柄を金地の貝殻に模写する体験を通して，児童・生徒たちは貝合わせの世界を深く味わうことができる．この題材の目的は日本の伝統文化の体験であり，その手段が制作なのだということを知ることができた．また基底材が自然物であり描画面が立体的である貝合わせは，制作する上で児童・生徒たちに新鮮な感覚を与えるという一面も持っている．さらに完成作品を使って遊ぶことができるため，制作後も日本の伝統文化を楽しむことができる．

図 15　制作の様子

しかし，この実践をそのまま実際の学校現場で教材として取り扱うには時間的な制約がある．まず授業前の準備に時間がかかりすぎる．人数分の貝殻一つ一つに和紙を貼り，金地を塗っていく作業や，3 段階の難易度をつけた絵柄の準備が必要である．これらの作業を授業自体に取り入れることができれば，実際の学校現場で実践することが可能になるかもしれない．また制作時間も十分に必要なため，3 ～ 4 時間程度の授業時間を確保しなければならないだろう．

Ⅲ－3 「ふわふわピクチャー」

（1）実践者　西田真理

（2）教材としての目的

この教材を通して児童・生徒たちに自分の描いた絵が宙に浮き，動くことの感動を味わわせ，幅広く，多様な発想・構想をする力を養わせる．

（3）実践までの流れ

（3）－a　フレンドリーでの実践

主に 6 ～ 9 歳の子どもを対象としたものづくりフェアでは，制作時間の平均が 10 分程度であったこと，アンケートで簡単すぎるという意見が多かったことから，60 分授業で，対象が中学生である適応指導教室では大幅に時間が余ってしまうことが予想された．そこで，風船への装飾をしても良いとし，絵を描くことに重点を置くためにもまず，風船も含めた全体の設計図をワークシートに描くように伝えた．

実践を終えて反省点として，設計図に入ってからは完全に個人の活動となるため，早い生徒は設計図を描き始めてから 10 分程ですべての工程を終え，完成させたが，遅い生徒は最後まで絵を描き，風船に取り付けることができずに終了してしまい，個人で進度に大きな差が出てしまった．その原因として次のことが考えられる．1 つ目は設計図にこだわり，和紙に描きはじめるまでに時間がかかってしまう生徒が多かったこと．2 つ目は実践者が絵を描き終えた生徒の風船を膨らませたり，糸やクリップの取り付け方を教えたりしなければならなかったため，そのような進度の遅い生徒への支援がほとんどできなかったことである．しかし，中学生にとっても新鮮で十分楽しめる内容であることがわかった．

（3）－b　事前打ち合わせ（熊本市立本荘小学校）

事前打ち合わせのための指導案作成にあたり，フレンドリーでの実践，次の対象が小学校 4 年生であることを踏まえ 3 点の変更を行った．1 点目は，設計図を描かずに直接和紙に描きはじめること．2 点目は，各工程で時間を区切り，全員で進度をそろえて制作させること．3 点目は，補助を 1 人つけ，授業と同時進行で人数分の風船を膨らませ，糸を付けておいてもらうことである．

加えて事前打ち合わせにおいても授業展開の変更が求められた．それは，風船を先に見せてしまうと，児童たちは風船の造形ばかりに目が行ってしまい，絵を描くことに集中できないのではないかという問題点が挙げられたためである．

（3）－c　事前アンケート・授業観察

児童の実態を調査するためアンケートを実施した．（熊本市立本荘小学校 4 年 1 組 17 名）

アンケートの集計結果は（図 16）のようになった．アンケート結果から，児童の半数以上が絵を描くことが好きだと思っていることが判明した．しかし，その他の児童は絵が下手だと思っていたり，何を描いたらいいかわからないと感じていたりすることが分かった．そのことから描き始めるまでに時間のかかる児童がいることが予想される．基底材に関しては段ボールやからだや木など様々な回答があり，和紙に絵を描くことには抵抗もなく，問題ないと思われる．ただ，描画材については今回使用するパステルを使ったことのある児童は一人もいなかった．そのため，パステルの特徴

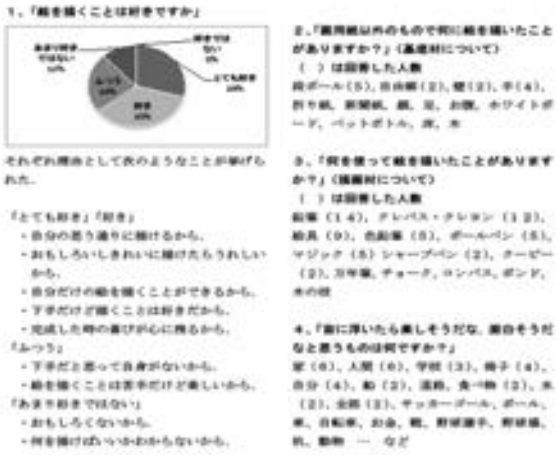


図 16　事前アンケート結果

や技法の説明が必要だと感じた．最後の質問では事前アンケートの時点で，ほとんどの児童が絶対に浮かないものを挙げているが，これを絵にするとなるとそれらも変わってくることが予想される．

また，2 度の授業観察を通し，学級の雰囲気，発表の様子などを見たことで，より具体的な授業のイメージを持つことができた．

(3) －d　学習指導案

事前訪問でのアドバイス，アンケートによる児童の実態から学習指導案の再考を行った．（図 17，18 参照）

図 17　指導案 1

図 18　指導案 2

事前打ち合わせでの問題を解決するため，風船を登場させるタイミングの変更を行った．授業展開では，最初児童には風船を見せずに，「宙に浮いたら楽しそうだな，面白そうだなと思うものは何だろう」という発問から入り，まず，絵だけを描かせることにした．全員絵を描き終ったら，「本当に浮かせてみよう」と，そこで初めて風船を登場させた．

(4) 実践

実際の授業では制作に入ってからすぐに，予想していた通り「何を描いたらいいかわからない」という児童が出てきた．一人ひとりや全体への声掛けをしたが，なかなか進まず，予定より 5 分遅れで次の工程に進んだ．しかし，重色やぼかしなど技法を上手く利用している児童は多く見受けられた．次の，浮力と重さを調整する工程ではクリップを増やしながら調節する方法しか紹介しなかったが，和紙を切って絵を軽くした

図 19　制作の様子

図 20　遊んでいる児童たち

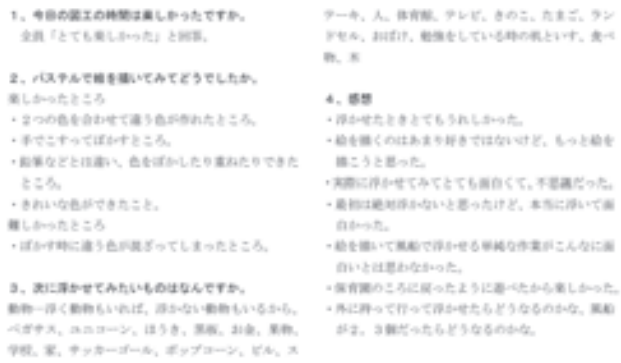
り，クリップを付けるために使うテープだけを付けたりして微調整する児童も出てきた．そのため，残りの 5 分でゲームをする予定だったが変更して，そのまま重さの調節を続けて完成させた．

(5) 分析

(5) －a　事後アンケート・まとめ

学習の成果を調査するためアンケートを実施した．(熊本市立本荘小学校 4 年 1 組 16 名)

アンケート集計結果は（図 21）のようになった．


1．今日の図工の時間は楽しかったですか。
全員「とても楽しかった」と回答。

2．パステルで絵を描いてみてどうでしたか。
楽しかったところ
・2つの色を合わせて違う色が作れたところ。
・手でこすってぼかすところ。
・鉛筆などとは違い、色をぼかしたり重ねたりできたところ。
・きれいな色ができたこと。
難しかったところ
・ぼかす時に違う色が混ざってしまったところ。

3．次に浮かせてみたいものはなんですか。
動物－浮く動物もいれば、浮かない動物もいるから。ペガサス、ユニコーン、ほうき、黒板、お金、果物、学校、家、サッカーボール、ポップコーン、ビル、スターキ、人、体育館、テレビ、きのこ、たまご、ランドセル、おばけ、勉強をしている時の机といす、食べ物、木

4．感想
・浮かせたときとてもうれしかった。
・絵を描くのはあまり好きではないけど、もっと絵を描こうと思った。
・実際に浮かせてみてとても面白くて、不思議だった。
・最初は絶対浮かないと思ったけど、本当に浮いて面白かった。
・絵を描いて黒板で浮かせる単純な作業がこんなに面白いとは思わなかった。
・保育園のころに戻ったように思べたから楽しかった。
・外に持って行って浮かせたらどうなるのかな。黒板がは。3倍だったらどうなるのかな。

図 21　事後アンケート結果

パステルの使用については，混色の記述が多く，実演しながら技法を紹介した効果が出たと考えられる．3 の質問では自分が描いた絵から発展したものや，身の回りのものが多く，事前アンケートに比べて一人ひとりの個性が出てきたと感じた．また，「勉強している（いすに座っている）時の机といす」という回答があり，単なる物ではなく，自分を含めた空間として捉えている児童もおり，発想の広がりが看取された．

(5) －b　考察

今回，ふわふわピクチャーを教材化するにあたり，この題材が児童・生徒にどのような影響や効果があるのかをじっくり考え，実践することができた．アンケート結果からもわかる通り，児童・生徒にとってもとても楽しい内容だったのではないかと思う．また，楽しいだけではなくパステルの技法や，重さの調整の仕方など学習することも多く楽しく学ぶというかたちができた授業で，新鮮だったと考えられる．加えて，児童・生徒の多種多様な発想力を引き出せた点は大きな成果であろう．

しかし，ヘリウムガスが高価な点や，補助が付かなければ 45 分ではできない点など実際の学校現場で教材として使うにはまだ課題も残る．今回は 45 分の授業であったが 2 時間連続の授業であれば，児童・生徒との対話なども増え，より豊かな発想力・構想力を引き出すことができるのではないだろうか．

Ⅳ　まとめ

「描く」ということは道具を扱いイメージを表出することとなる．表出の方法は様々である．イメージは作者の心の中に存在し，そのイメージに沿った形態が外界（現実世界）に現れる．難点は，イメージをすることと描く方法である．これらは困難であると思い込むが，その束縛を解きほぐすことが出来れば「描く」ことが自由になる．

3 つの取り組みは，それぞれ別の角度でイメージと描画（描出）に迫るものである．

「このはコラージュ」では自然物を直に素材としてボンドで貼り付けてイメージを創出する行為を行うものであり，筆による描写を行わない，抽象的感覚を喚起させる絵である．オブジェと異なることは平面空間の内容に拘り，画面世界を自然物により描写する点である．自然素材貼り付けであるので，細かい具体的な描写は出来ないが，そこに心のイメージを投影し，図像化を図ることとなり抽象画世界へも誘うものである．自然物にはそれ自体にも魅力がある．自然物の素材感と色彩を活かした作品化に終始することとなり，明瞭な具象的描画には至れないことを肯定化することで，より感覚に頼ることが可能となった．子どもたちにとって描き表わす新感覚ではなかったであろうか．

「貝合わせ」では基底材の新鮮さと歴史文化の魅力が納包されている．画用紙ではない貝殻という異素材に描く面白さと歴史文化の持つ魅力が描写を楽しむ要素となった．具象的絵画であり，歴史的魅力を包含する大和絵の味わいはイメージを喚起させ筆使いの魅力を学ぶ機会となっている．

「ふわふわピクチャー」では絵を宙に浮かせることで，浮かぶということがイメージを喚起させている．また，実際に絵が浮遊する様子を体感することで絵が壁に飾るだけではない不思議なイメージの具現化を目の当たりにした．浮いたら面白いと思うものを描くイメージへの働きかけと実現の 2 つの面が描画と鑑賞（浮遊絵画の体感遊び）の興味・関心を広げる．また，美しいながらも重量を軽くするためのパステル画による具象イメージ描写は，新鮮な描画法を体感できたのではなかろうか．

3 つの試みは教材となり図画工作の授業となった．いずれもイメージを醸成し興味を抱き描出させることは有効であったが，準備と制作時間が制約となるところである．今後の課題となる．

V　おわりに

今回の試みは複雑な手立てを構築して「描く」ことを考察・実践した．ものづくりの魅力との融合で「描く」ことの可能性の視野を広げ，また，「描く」行為に考え迫った．最も簡単な方法は紙と鉛筆で自身のイメージを描き出すことである．痕跡を残すものであればどの様にでも描けるものである．大切と考えたことは，描くことの緊張と束縛を緩和し，有史以前から存在している「描く」ことの面白さと手ごたえを授業の中で体感させることである．自身でイメージを作り上げ，様々な用具を扱い，イメージを表現することを願うものである．義務教育現場での教育実践は誰もが楽しく意義深く描き表わすことの一助になるものとしたい．魅力的な絵は，作者が興味を抱きながら，様々に工夫し熱意をもって完成させている作品である．

謝　辞

本研究にご協力いただきました熊本市教育委員会総合支援課教育相談室の皆様，熊本県小中学校長会長・熊本市立本荘小学校長石井祐治先生，他，関係の方々に深く感謝いたします．

注

1）松永拓己・工藤明日香・岩本望来・西田真理 「絵画・ものづくりの融合制作の実践 1」『熊本大学教育実践研究第 30 号』2013，pp39 － 48

2）松永他　前掲書　pp40 － 47

参考文献

・松永拓己・工藤明日香・岩本望来・西田真理 「絵画・ものづくりの融合制作の実践 1」『熊本大学教育実践研究第 30 号』2013，pp39 － 48

・辻茂・高階秀爾・佐々木英也・若桑みどり・生田圓，『ヴァザーリの芸術論「芸術家列伝」における技法論と美学』，平凡社（1980）

・小学校学習指導要領解説［図画工作編　平成 20 年 8 月］文部科学省